
100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

ゆで卵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

【Nコード】

N7735Y

【作者名】

ゆで卵

【あらすじ】

とある島に100人の人間が集められた。その100人に告げられたのは殺人ゲーム。最初は、それを信じられないが、科学では証明できないことが起こり、実際に人が死んでしまう。そこから、人間達は生き残るために他人を殺すことに決めた。この命をかけたゲームに歓喜する者、恐怖する者、絶望する者、たくさんの人間が織り成す殺人ゲームの行く末は……。

第1話 殺人ゲームの始まり

「んっ」

地面で寝ていた少年は目を覚ました。

「ふはあゝ。よく寝た。」

少年は体を持ち上げて両手を頭の上に伸ばして背伸びをした。背伸びを終えた少年は周囲を見てある事に気がついた。

「ここどこだ??」

少年は自分がどこにいるのかわからなかった。

（昨日は部活をした後、疲れたから寄り道をしない家に帰って、そのまま直ぐベッドに入ったよな。服装は学生服のままだし。なのにどうしてこんな森の中にいるんだ……）

少年は本当に自分がどこにいるのか、そして、どうしてこんな森の中にいるのかわからないようだった。周囲を見渡してもあるのは草木だけ。人の気配がまったくしない。

（もしかして、夢遊病ってやつか？ 寝ている間に自分で気づかずこんな見知らぬ場所に来ちゃったとか……）

「いやいや、それは無いか。俺が住んでたのは確かに田舎だったが、こんな森は近くなかった。」

少年は自分が考えた事を首を横に振りながら否定した。

(そうすると、理由がまったく想像つかないんだが……)

少年が頭の中で考えを巡らせていると

『起きたようだね。風間小太郎君。』

「な、なんだっ!？」

突如、男の声で自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。しかし、周囲を見るが誰もいなかった。もしもの為、周囲の気配を探ったがやはり人の気配はしなかった。

『ほお。普通の高校生が周囲の気配を探るなんて驚きだね。いや、でも君は普通の高校生じゃないか。なんだって君は忍びの血をひいてるのだから』

「な——っ!？」

小太郎はその内容に驚きを隠せなかった。彼が忍びの血をひいているのは父親以外にはいないのだから。では、これは父親によるいたずらなのか。少し考えて違うと判断した。厳格な父親がいたずらをするはずがない。では、これはいたずらではなく、忍びの修行なのか。そう考えていると

『これは、君の父親はまったく関わっていないからね。君の父親だけじゃない、君に関わりを持つ人間誰一人関わっていないから。』

「——んっ!！」

小太郎は心を読まれたことに衝撃を受けた。自分が今までやってきた修行は意味が無かったのではないかと自分自身に問いかけた。

だが、すぐにやめた。こんな事をしても意味がないと悟ったから。
今やるべき事はただ一つ

「おまえは何を知ってるんだ??」

情報収集だ。

『何でも知ってるよ。君がどんな人間で。君の家族がどんな人間か。君が忍びの修行で何をやってきたか。どんな事でもね。』

小太郎の顔には一筋の汗が流れていた。もしかしたら、こいつはあの事を知っているのかもしれない。あの事はあまり気にしてはいないが、周囲にばれると結構まずい事になってしまう。

『心配しなくてもいいよ。別に君が今考えているあの事について誰かに話そうなんて思っていないから。母親殺しの小太郎君。』

「……………!!!」

『おっと、話してしまったよ。あ、でも、今は君に話したただけだからノーカンだよ。』

「何が目的だ……………」

『あつ、そんな怒らないでよ。別に小太郎君とけんかしたいわけじゃないんだ。』

「……………」

小太郎は男の声の持ち主が今どこにいるかわからないが、とにかく睨みつけることにした。

『ま、無駄話はここら辺にしといて、本題に入りますか。まず、君をここにさらったのは私だから。』

男の声はさらつと悪気なしに言った。

「なっ!？」

小太郎は驚いたがそんな事はお構いなし。男の声は話を続けた。

『で、実を言うとさらったのは君以外に99人。つまり君を入れて100人ピツタシと言う事だ。君たちをさらった理由は君たちにやつてもらいたいゲームがあるんだ。』

「ゲー……ム……?」

『ああ、ゲームだ。簡単なゲームだ。この空島にいる100人のプレイヤー同士で殺し合いをするゲームだ。簡単だろ。』

「な……につ!？」

男の言った事が一瞬理解できなかったがすぐに理解した。が、理解しても到底受け入れる事が出来なかった。

（こいつ狂ってるのか。さらつといて、いきなり殺し合いをしるなんて出来るはずがない。そもそも、空島って何だ? ゲームか何かと勘違いしてるんじゃないか?）

『で、殺し合いの為の武器は拳銃や剣。では、ないからね。君たちが人を殺すために使う道具。それは……魔法だっ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!』

（魔法!? やっぱりこいつ、頭がいかれてやがる。現実と妄想がごっちゃになった奴か。だが、そう言う奴ほど何をやるかわからないものだ……）

『魔法を発動するには手の甲に刻まれている文字を声に出して読むだけ。簡単だろ。一応言つとくが、この島に残っている人間が3人になるまで家に帰ることはできない。つまり、3人しか生き残る事が出来ないんだ。そのところは、しっかりと心に刻み込んで置いてくれよ。では、説明はこれで終了にする。小太郎君。検討を祈る。』

「おいっ！ ふざけるのも。いい加減にしろ。殺し合いをしるだど……、そんなこと誰がするかっ！！ 何かいよっ！」

小太郎がそう叫ぶが男の返事はなかった。どうやら、もう、何も言つつもりはないらしい。小太郎はその事を悟りこれからどうするか考え、とにかく歩くことにした。他に人がいるかもしれない。

『ようやく始まりましたね』

先ほどの男の声を発していた男性が椅子に座りながらワインを片手に壁に映し出された島の映像を見ていた。

『今回はどのくらいの額になるのか楽しみです』

男性はそう言いながらワインに口をつけ、少しだけ飲んだ。壁に映し出された島の映像には小太郎の姿が映っていた。よく見ると、島の映像を映している機械は存在しなかった。もちろん、壁にテレビの類は存在しない……

小太郎は森の中をさまよっていた。どこまで歩いて同じ光景が続いており、どのくらい歩いたかわからなくなっていた。もう5km歩いたかもしれない。実は500mしか歩いていないかもしれない。小太郎の心は少しずつ追いつめられていた。忍びの修行をしているとは言っても、まだ16歳なのだから。それに、今の時代の修行は戦国時代などの修行などとは比較できないほど楽なものだ。なぜなら、修行の最中に死ぬ事がないのだから。このときほど、小太郎は死の恐怖を味わう修行をしとけばよかったと思ったことはなかった。

色々考えながら歩いているとついに小太郎は森を出来る事が出来た。若干の喜びを感じたがそれはすぐに絶望へと変わった。それは、森を抜けた先のとある光景を見てしまったからだ。その光景とは……

「大地がない……」

そう、大地が無かったのだ。大地が無いなら何があるのか。それは大空だった。見渡す限り空、空、空。下を見てもやはり空。雲はまったくなく、もの凄く見通しがいいのに遠くに見えるのもやはり空。大地など、自分が通ってきた方向以外に存在していなかった。このとき、ようやく男の言った事が荒唐無稽な話ではない事を理解した。

（この島が空に浮いてるなんて……）

小太郎は自分の右手の甲を見た。そこには影と刻まれていた。

（もし、俺が影と唱えて何か起こったら男の話が嘘でなくなるということだ……）

小太郎の額に汗がにじみ出ていた。

ゴクッ

小太郎の喉を鳴らす音が響いた。そして、小太郎が文字を唱えようとした瞬間。

ファイア
「火!!」

小太郎の真横に突然火が現れた。

第2話 最初の犠牲者そして報酬

ファイア
「火!!」

突如、小太郎の真横に火が出現した。いや、正確には違った。小太郎の後方から飛んできたのだ。

「なっ!?!」

小太郎は火の出現に驚きのあまり倒れ込んでしまった。

「あゝ。はずしちゃったか。なかなか当たらないものだな。」

森の中から一人の男の子が頭に手を当てながら現れた。信じられないが言動からこの火を出したのはこの男の子のようだ。

「よし。次は当てるぞ。」

男の子はそう言って小太郎に手をかざした。小太郎は男の子が何をしようとしているのかわからなかったが、手を見るともの凄い寒気を感じ咄嗟に横に跳んだ。

ファイア
「火!!」

小太郎が横に跳んだ次の瞬間、小太郎がいた場所に男の子の手から突如、出現した火の球が命中した。

「そっか。相手が避ける事も考えないといけないのか。」

男の子は笑っていた。この状況を楽しんでいるようだった。この光景を茫然と見ていた。目の前でありえない光景が繰り広げられたのだからしょうがない。しかし、小太郎の頭の中にこの場所に来て最初聞いた男の声を思い出した。

（『君たちが人を殺すために使う道具。それは……魔法だっ！！！！！！！！』）

その言葉を思い出し小太郎は自我を取り戻した。

（あ、あの言葉は本当だったのか……）

そうこうしているうちに男の子は小太郎に手をかざしていた。

「今度こそ当てるからね。」

「なつ！！」

「火！！」

小太郎は無我夢中に跳んだ。そのおかげで避けることに成功した
が……

「ファイア
火！！」

男の子は小太郎の着地地点に向かつて魔法を発動した。小太郎は慌てて着地したため態勢が完全に崩れていた。

（よ、避けられない！？　こんなところで死ぬのか！？　俺はこんなところで死ぬのか！？　嫌だ死にたくない…）

「死にたくないっ！
影オ————ッ！！！！！！！！！！」

男の子から発せられた火の球は小太郎に直撃した。

「ハハハッ。やったぜ。命中したー。このゲーム最高だ。ファンタジーの世界みたいに魔法を使えるし、その力を使って好きなだけ人を殺していいんだから。」

男の子が高笑いをあげていると、小太郎がいた場所がかすかに動いた。

「——ん??」

男の子もその事に気づき燃えている場所を見ると、黒いものが火を一瞬にして消すのが見えた。そして、火が消えた場所には無傷の小太郎が立っていた。

「なっ!?! ど、どうして生きてるんだ…」

男の子はその光景を見て驚いていた。

「魔法を使えるのはお前だけじゃないのを忘れたのか?」

小太郎がそう言うと男の子は気がついた。小太郎があの一瞬に魔法を発動させたのだと……

「そ、そうだったな… 魔法が使えた喜びで忘れてたよ。まあ、せっかく生き残ったところ悪いんだけど…」

男の子は手をかざして

「死んでくれないかなっ！！ 火っ！！！」
ファイア

男の子の手から火の球が出現し、小太郎めがけて飛んだ。

「もう、お前の攻撃は効かない。影。」
シャドー

小太郎がそういうと小太郎の影が突然動き出し飛んでくる火の球の前に移動しぶつかった。直後、影は火の球を地面にたたきつけ消化した。

「なっ！？」

男の子は驚愕した。当然だ。この攻撃で小太郎を簡単に殺せると考えていたのだ。それを、八エを手ではらうような簡単な動作で防がれたのだ。驚かずにいられるはずがない。

「く、くそっ！！ 火っ！！！」
ファイア

今の光景が信じられないのか、男の子は小太郎めがけて魔法を發動した。しかし、それも小太郎の魔法にことごとく防がれてしまう。

「なぜだっ！？ どうして防がれるんだ。俺の魔法が弱いつての言うのかっ。ふざけるな、ゲームならちゃんと平等にしゃがれっ！！」
「お前の魔法が弱い訳じゃない。おまえの使い方が悪いだけだ。」

小太郎の言葉に完全に頭にきた男の子は雄たけびをあげながら魔法を無我夢中に発動する。小太郎は自分に当たる魔法だけを見極め、そして、影を操って防いでいた。小太郎の後ろは火の海とになっていたが、小太郎の周囲には火が存在しなかった。

「く、くそおお。」

男の子は小太郎に殴りかかった。魔法が効かないなら殴り殺せばいいと考えたらしい。完全に頭に血がのぼっていたらしくまともな考えを持てなかったようだ。しかし、殴り合いでも小太郎に分があった。小太郎は忍びの修行を今までしてきたのだから。その結果、簡単に男の子を殴り飛ばすことに成功した。男の子は森ではなく、空が延々と続いている崖の方に投げ飛ばされた。小太郎はこの後すぐこの事を後悔することになる。

「う、うぐう……」

男の子はおなかを抱えながらもだえていた。おなかにくらった拳がもの凄く痛かったらしい。小太郎の事を憎しみのこもった目で睨みつけた。

「もう、いいだろう。とにかく、殺し合いなんかやめて話し合おう。」

「ふ、ふざけるな。おまえは絶対に殺す。絶対に！！」
ファイア
「火っ！！」

男の子が魔法を発動した。しかし、火の球は小太郎ではなく、空高く飛んでいった。なぜなら、男の子が火の球が飛んだときの反動に体が耐えられず、後ろに倒れ込んでしまったからだ。これは、小太郎にとっては運が良かったことだ。しかし、男の子にとっては最悪の事態だった。なぜなら、倒れ込んだ先には大地が無かったからだ。

「へっ！？」

男の子は気の抜けた声を発した。自分の置かれた状況に頭がついていけないようだ。しかし、それも、自分の目の前に岩壁が見える
と今の状況を理解したらしい。

「た、助けて… 誰か助けてえー！！！！！！！！」

男の子は大粒の涙を流しながら腕を脚を振り回した。落ちるのに
必死になって抵抗しているのが手に取るようにわかった。

それに対して小太郎は目の前で落ちそうになっている男の子に
対して手を必死になって伸ばした。

（と、届け〜っ！！）

その健闘むなしく小太郎の手は男の子を掴む事なく空を切ったの
だ。「駄目か」と思った小太郎だが、ある事をひらめいた。

（これなら、この子を助けられる）

「影！^{シャドー}！！」

小太郎は魔法を使って男の子を助けようとした。男の子は自分
に向かって飛んできた影を掴もうと必死に手を伸ばした。助かりたい
一心で。そして、影が男の子に追いつきそれを掴もうとした。

しかし、ここで予期せぬ事態が起こった。もし、小太郎がこの魔
法をはやくに発動して練習していたら、こんな事態は起こらなかつ
ただろうに……

男の子が影を掴んだ瞬間、男の子の手は真つ二つに分かれてしま

った。そして、影はそのまま男の子を貫いたのだった。そして、影は男の子を空島に引つ張り上げた。確かに男の子がこの空島から落ちなかった。しかし、その代わりに命を落としてしまった。

「なっ！？……………」

小太郎は理解した自分がこの男の子を殺してしまったことに……

「そ、そんな……俺は助けようとしたのに。」

小太郎は男の子の死体を見てつぶやいた。小太郎は男の子が自分をじっと見ているように思えて急いでこの場を立ち去った。この場にいる事に耐えられなかったみたいだ。

小太郎は息を切らしながら森の中を走り続けた。一刻も早く、あの場から離れたかったのだ。そして、走り続けると大きな木を見つけ、そこに人が隠られるような穴を見つけた。小太郎はそこに飛び込んだ。もしかしたら、さっきの男の子が生き返って自分の事を追いかけているかもしれないと考えるといてもたってもいられなかった。小太郎は頭を掴みながら震えていた。

（どうして。どうしてこんなことになるんだっ！！）

小太郎は思っている事を口に出せなかった。声に出したら見つかるかもしれないと思ってしまったからだ。実際のところ、男の子の死体はあの崖に置き去りにされたまま動いていなのだが。

『皆さま。ただ今、一人のプレイヤーが他プレイヤーに殺されました。残り99人となりました。』

「——ッ！？」

その言葉を聞き小太郎は身を固くした。

『そこで、プレイヤーが99人になったことで参加者の皆様にこのゲームの報酬についてお話したいと思います。』

空島に散らばっていたプレイヤーがこの言葉に耳を傾けた。

『このゲームの報酬……。それは、クリアしたプレイヤーの願いを1つだけ叶える事です』

[illegible]

プレイヤーがその言葉に驚きを隠せなかった。しかし、今の小太郎にはそんな事どうでもよかった。

小太郎は昔の頃を思い出した。

あの日は雨が降っていた……

「お母さんっ。」

10歳の小太郎は母親に抱きついた。その顔はもの凄く嬉しそうだった。

「なに、小太郎？」

小太郎の母親は小太郎の事を優しく包み込むような笑顔を浮かべ

小太郎に返事をした。

「うんとね。僕ね、この前、お父さんに教えてもらった技がね出来るようになったの。見てて。」

小太郎は笑顔を見せながら言った。母親に自分の凄いところを見せて褒めてもらいたい一心だった。しかし、大失敗してしまった。失敗したつけは母親が払ったのだ。この時、小太郎の母親が死んだ。小太郎の事を庇って……

———
今更だ…… あの日俺は母さんを殺したんだ……

小太郎が母親を殺した日を思い出していた。

『願い事はどんな事をでも叶える事ができます。お金が欲しいなら、一生困らないお金を。女性が欲しいなら、あなたの理想な女性を。国が欲しいなら、どこかの国の王に。』

『そして、誰かを生き返らせたいのなら、一人だけ生き返らせよう。』

『———ッ!？』

その言葉を聞いた小太郎は驚いた。

『ただし、叶えられるのはこのゲームで生き残った人だけ。皆様のご健闘を期待します。』

プレイヤー達はこの言葉を聞いて完全に目の色を変えた。もちろん、小太郎もその一人だった。

（このゲームに生き残ればまた母さんに会える……）

小太郎は落ち着きを取り戻した。その顔つきは完全に人殺しの顔だった……

第3話 仲間

「なるほど。」

小太郎は自分の魔法を発動しどのような能力が把握した。

（魔法は凄いな。想像以上の力だ。）

小太郎は周囲を見て思った。小太郎の周囲にあった木々は鋭利なもので切り刻まれており、真つ二つに割れているものもあった。これらは、小太郎の魔法の試し切りの犠牲になったものだ。

（しかし、他の人間も俺と同じように魔法を使うんだな。常に周囲を警戒しとかないと）

小太郎は周囲を警戒しながら歩き始めた。今は誰かと戦闘して経験を積む事が大切だと考えた。小太郎はやはり忍びだという事を歩き方でわかった。森の中でまったく足音をたてず歩いているのだ。

「はあはあ……」

森の中で一人の女性が走っていた左腕から血が流れていた。

「くっ。はあはあ……」

女性は傷口が痛み顔を苦痛にゆがめるが、止まって腕を手当をしようとしなない。否、手当をしたくても立ち止まれないのだ。女性の

後ろには女性に傷を負わせた男が追いかけて来ていたから。

「待ってくれよ。俺と楽しい事しないかい。俺を楽しませてくれるなら、俺のペットとして一緒にクリアしてもいいぜ。ヒャッヒャッヒャー!」

男はゲスな笑いをあげながら女性を追いかけていた。

「はぁはぁ……」

そんな男の言葉には耳を貸さず走り続けていた。しかし、女性は足を木の根にひっかけ倒れてしまった。

「追いついたっ」

男はそう言つて女の前に立った。そして、ズボンのチャックを指差した。

「俺を楽しませてくれないと殺しちゃうよ。」
「っ!」

女性は憎しみの目を男に向けた。

少し時間が遡り、小太郎は女性が男に追いかけているのを見つけた。

（どちらかが死んで生き残った方に隙が出来た瞬間に殺ろう）

小太郎はそう考えて2人の追いかけてこを見ている事にした。そうこうしているうちに女性が根に引つ掛かり倒れ込んだ。

（そろそろか……）

小太郎は手に力を入れて戦う準備をした。

「——なっ!？」

倒れ込んだ女性が顔をあげて男を見た。そして、その顔は見覚えのある顔だった。そう、その顔は小太郎の母親にそっくりだった。

「う、嘘だろ……」

小太郎は茫然とした。

（どうして、母さんが…… 嫌、あれは母さんじゃない。た、他人の空似だ……）

そして、男が女性を犯そうとしているのが見えた。直後、小太郎の頭の中が真っ白になった。そこには、もう小太郎の姿が無かった。

（どうして、私がこんな目に合わなくちゃいけないの……）

女性は泣きながら思った。

「そろそろ、待てないかな。そんなに死にたいなら殺してあげるよ。」

「っ！！」

女性はその言葉を聞いて首を横に振った。自分の命とは変えられない。女性がうつむきながら、そつと手を伸ばすと、伸ばした手の甲に生ぬるい液体のようなものが落ちてきた。女性はこれが何かと思いいてみると、血液だった。そして、恐る恐る顔をあげると

「——っ！？」

男には首から上が無く、そこから血が噴水のように溢れていた。その光景を見て女性は男の死体から離れた。彼女は何が起こっているのかわからなかった。唯一、彼女にわかるのは、男が誰かに殺されたぐらいだ。

タンッ

女性の後方で音がした。彼女が振り返ると男の子が立っていた。そして、彼の手には先ほど彼女を襲っていた男の顔があった。どうやら、彼があを男を殺したらしい。じつと見ていると、男が近づいてきた。目を覚ましてから繰り返された非現実的な出来事で彼女の精神は疲労していた。だから、彼女は自我を保っていられなくなつた。彼女の意識は暗い闇の中に吸い込まれた……

「んっ……」

先ほどの女性が目を覚ました。彼女は自分が生きていることにほっとした。しかし、すぐに恐怖した。もしかしたら、自分が生かされたのは先ほどの男のように自分の事を犯すためなのかもしれない。はやくここから逃げなくては。そう考えても体が思うように動いてくれない。怖くて腰が抜けてしまったらしい。

「目が覚めたのか。」

「っ!？」

彼女は声がした方を見ると先ほどの男が立っていた。きっと、この男も自分を犯そうとするんだ。彼女が身構えると

「一応、言っておくがあんたを犯す気はないからな。」

「え……」

彼女はいまいち信じられなかった。では、なぜ自分を助けたのか。何が目的なのか。疑うと止まらなくなる。頭の中に彼のことを疑う言葉が次々と浮かんできた。このままでは、頭の中で処理する事が出来なくなりそうなので、勇気を出して聞くことにした。

「あ、あなたの名前は何ですか。」

勇気を振り絞る事が出来なかった。そんな自分を情けないと思った。

「風間小太郎…… あんたは？」

「わ、私ですか。私は小野寺ゆみ。」

小太郎は彼女をじっと見つめた。

「な、何かおかしいですか？」
「いや、おかしくない。」

小太郎はそう言つとそっぽを向いた。

（遠くから見たときはそっくりだと思つたけど、そこまで似ているわけじゃないな。）

小太郎はそう考えて立ち上がった。彼女の体がびくつと震えたが気にしない。小太郎はこの場を立ち去ろうとした。

「ど、どこ行くんですか？」

ゆみはびくつきながら小太郎に問いかけた。

「この島がどうなってるか知らないから探索するつもり。」

「す、すぐ…… 戻ってきますよね？」

「戻ってくるつもりはない。」

先ほどまでは小太郎の事を疑うような事を考えていて、一人になりたいと思つていたが、いざ一人になるかもしれないと思うと怖くてしょうがない気持ちになった。

「な、なら…… 私も連れて行つてください。お願いします。」

ゆみは、小太郎に懇願した。

「……………」

ゆみは、返事が無いのもう駄目かと思ひかけたその時

「わかった。」

小太郎が了承した。その返事を聞きゆみは泣いた。嬉しかったのだ。小太郎は彼女を胸に抱き寄せ彼の胸で好きなだけ泣かせてあげた。

（やっぱり似ていない。母さんはおれの前では泣かなかった。どんな状況でも笑っていた。そう、母さんが死んだあの瞬間も……）

小太郎は昔の事を思い出して泣き顔になった。しかし、誰も彼の表情に気がつく事は無かった……

しばらくして彼女は泣きやんだ。泣いたことですっきりしたのか彼女の顔は先ほどよりも元気になったように見える。

「す、すいませんでした。いきなり泣いてしまつて……」

「俺は気にしてない。そんなことより小野寺さんに聞きたい事があるんだ。」

「いいですけど…… できれば、私の事はゆみと呼んでください。名字はあまり好きじゃないんです。」

「わかった。なら、俺の事も小太郎って呼んでくれ。」

「はいっ。小太郎さん。」

彼女の笑みを見て小太郎は少し照れた。照れを隠すため軽くせき込んだ。

「先ほど、男に追われていただろう。何故、反撃しなかったんだ。魔法を使えば戦えたはずだろう？」

「そ、その……」

彼女はもじもじした。

「まあ、話したくないなら話さなくてもいいが。」

「い、いえ。むしろ聞いてほしいです。」

彼女は身を乗りだして言った。先ほどまで、小太郎の事を恐れていたときは別人のようだった。それを見た小太郎は驚いた。

「これを見てください。」

ゆみは手の甲を見せた。そこには、「空間^{ルーム}」と書かれていた。

「1文字じゃないのかっ!？」

小太郎は驚いた。自分もそうだが、先ほど殺した男も1文字だった。

(てっきり1文字しか書かれていないのかと思っていたが……)

「どんな力があるんだ？」

「それが…… 実際に見た方がはいいです。」

彼女は手のひらを上にして

「空間^{ルーム}」

魔法を発動した。小太郎は2文字だから凄い魔法だと予想していたが、その予想とはかけ離れた魔法が発動していた。島の地図のよくなものが映し出されていた。

「そ、それだけ？」

彼女はしょんぼりしていた。

（確かに、島の地図があれば助かるが……。あまりにもしょぼすぎないか。）

「そ、それで小太郎さんの魔法はどんなのですか？」

「俺の魔法は自分の影を操る魔法だ。それで、いろいろなものを切ったりする事が出来る。」

「なっ！？ わ、私の魔法とは強さが全然違う……」

小太郎の言葉を聞いてゆみは愕然した。

「あまりにも不平等すぎます。」

「まあ、確かに……」

（彼女の言うとおり能力に差がありすぎる。殺人ゲームをしろって言っているのに戦闘能力が無い魔法なんて… 死ねって言ってるも同然じゃないか。それとも、まだ俺に言っていない能力が……。それは無いか、もしあったらさっき俺が殺した男に使っていたはずだ。もしかして、俺たちに知らされていないルールがあるのかもしれない。）

「まあ、気にする事はないじゃないか。地図は結構役に立つぞ。」
「そうかもしれないけど……」

ゆみは納得がいかないようだ。

「それに、もしゆみが強い魔法を持っていたら俺たちは殺し合っていたかもしれない。少なくとも俺は殺そうとするだろうからな。」
「あ……」

2人の間に気まずい空気が流れた。

「まあ、ゆみの魔法は弱いからな。殺したりしない。どうせ3人はクリア出来るんだから、無駄に強い奴手を組んで裏切られるよりはお前みたいに弱い奴といた方が安心できる。だから、ついでお前も守ってやるよ。」

小太郎は恥ずかしさでそっぽを向いた。小太郎の言葉を聞いたゆみはしばらく驚いていたが、どこか嬉しそうだった。

「じゃあ、私たちはチームってことだね。」
「ああ。」

ゆみが差し出した手を小太郎が握った。その瞬間、2人の手が光った。

「何だっ!？」
「何っ!？」

すぐに光は消え、その代わりに手のひらに「組^{チーム}」と刻まれていた。

「どういうことだ？」

2人は手のひらに刻まれた文字を見て言った。

『プレイヤーの皆様。ルールの説明をさせていただきます。』

「——ッ!？」

男の声が島中に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7735y/>

100人による生き残りをかけた殺人ゲーム

2011年11月24日16時54分発行